

私は、陸上の経験がなくただの素人だが、30代の頃は、11月に須賀川市で開催される「円谷幸吉メモリアルマラソン」に毎年のように出場していた。日常的に走っているのであればいいのだが、私の場合は、いや私の人生そのものが「一夜漬け」である。レースの1週間前から走り出し、4～5日走っただけで、いきなり10kmを走るのである。

2校目のH中学校時代に、誘われるままに何人かで走り出し、自然と大会に出るようになった。その流れで、それぞれが転勤した後も11月になると須賀川で再会し、それぞれのペースで走ることを楽しむというパターンになった。

この10kmが辛い。まるで人生のようである。いつも、「どうして申し込んでしまったんだ」「やめればよかった」「歩こうかな」「今の自分には、この辛さが必要なんだ」などなど、約45分間の葛藤が続く。それでも、走り切った後の充実感は、なかなか体験できないものである。結局、誘われるままに、次の年も走ることになる。ある年は、箱根駅伝にも出ている東洋大学のランナー集団を目の前で見たこともあった。信じられないスピードだった。とても同じ人間とは思えなかった。

またある年は、10月の「福島市民健康マラソン」にも出場したことがあった。5kmだったが、これが10kmよりも苦しかった。距離が短い方が楽だと勝手に思っていた素人は地獄をみた。距離が短いと思うと、スピードを上げなければと思ってしまう。逆に距離が長いと、そうは考えない。結局、5kmだと、ずっと全力で走っているような感覚になる。約20分だったが、「もういやだ」と何度も思った。加えて、5kmだと走り終えた充実感もさほどない。次の年は出るのをやめた。

40代になり教頭2年目には、何かやりたくなかったのか、家族で「郡山シティマラソン」に出場した。正確には、妻は応援、私が5km、息子と娘は小学生の部に出場した。もちろん練習などしない私は、また地獄の5kmを走ることになった。それでも、以前とは違い、最初からタイムを意識していないので、精神的には楽だったが体がきつかった。当然、タイムは遅くなり、充実感も味わえなかった。

県教育センターに勤務しているときである。私の隣の席の高校国語担当の指導主事の方が走る人だった。彼から走ることにに関して、たくさんのご教授いただいた。走る人専用のすごい腕時計があること、シューズはやや大きめがいいこと、毎日走ろうとランニングを始めると、最初は体重が増えてしまうこと、大会に出る際の準備物一式、そして走るフォームなどである。

その走る人がアクションを起こした。所員に、センター陸上部員募集のメールが送信された。記念すべき第1回練習会には、10人ほどが集まった。17:15正面玄関集合、準備運動、そしてキャプテンを先頭に走り出す。走るコースは、キャプテンしかわからない。部員はついていくだけである。

キャプテンは、当時センターのすぐ近くに住んでおり、ランニングに適したコースを熟知していた。瀬上地区の裏道をすべて把握している状態であった。それだけ、日常的に走っていたということである。あるときは、橋をわたり伊達市に入りおしゃれな住宅街である諏訪野まで走ったこともあった。

(次号に続く)